

平成 21 年 5 月 25 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17520279
 研究課題名（和文）認知類型論的観点からみたモダリティ研究—文法化のあり方をめぐって—
 研究課題名（英文） A Study of Grammaticalization of Modality: A Cognitive Typological Perspective

研究代表者

黒滝 真理子 (KUROTAKI MARIKO)
 日本大学・法学部・准教授
 研究者番号：20366529

研究成果の概要：「モダリティの意味変化において、その動機や方向性は言語によって異なる」（黒滝 2004）とする仮説を検証すべく、日本語と類型論的に大きく異なる特徴を有する他言語や、類型論的に非常に類似した言語との対照研究を多角的に行った。それにより、個別言語にみられるモダリティの特異な文法化現象から意味構造のあり方や成り立ちを分析し、とりわけ日本語のモダリティの文法化の特異性を相対化させていった。さらに、言語による相違を認知様式の類型（文化モデル）の違いにより講究し、認知類型論的観点から論じるに至った。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,100,000	0	1,100,000
2006年度	800,000	0	800,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,100,000	360,000	3,460,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：モダリティ、認知類型論、epistemic、文法化、意味変化、プロトタイプ

1. 研究開始当初の背景

(1) 文法化とは、それまで文法の一部ではなかった形が歴史的変化の中で文法体系に組み込まれるプロセスのことであり、従来通時的変化の帰結と考えられるものに限定されていた。よって、歴史的な文献資料を豊富にもつ言語（日本語や英語等）での伝統的研究の貢献度が高かった。しかしながら、黒滝（2004）博士論文「Deontic→Epistemicの普遍性と相対性—モダリティの日英対照研究—」で、文法化は言語により異なるとする認知類型論にお

ける具体的な可能性が示唆された。

(2) 文法化を論じる際、歴史的観点とは別に、類型論的に他言語との比較研究を通じて認知言語学的観点から分析することで、日本語のモダリティ体系の特徴は相対化できる。認知言語学と類型論的言語学の2分野を統合した認知類型論的観点からの研究はまだ緒に付いたばかりで、とりわけその観点からのモダリティ研究は皆無に等しいのが実情である。

そもそも認知言語学は言語に対して有益な示唆を与えてくれてはいるものの、実証的研

究の蓄積が少ない。また、言語の多様性の中で普遍性を探るための対照言語学的アプローチは、日英語を対象としたモダリティ研究が大半を占め、日本語とその他の言語との対照研究は皆無に等しいのが実情である。

このような現状を踏まえ、本研究は、異なる言語のモダリティ現象の背後にある認知のあり方を類型論的観点から追究するものである。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、黒滝 (2004) の仮説に基づき、モダリティの文法化において、日英語の対照にとどまらず、近隣のアジア諸国や他言語との対照を通じ実証研究を積み重ねていく。それは、文法化という現象が「言語変化」を捉えている以上、典型例はもとよりその周辺例や境界例への着眼が重要になってくると考えられるからである。

(2) 黒滝 (2004) は、日本語のモダリティに文法化の反例と考えられる現象があるという議論を展開した点に新機軸がある。それは、従来言語普遍的に存在するとされてきたunidirectionality (単一方向性 Traugott 1995) の有効性のあり方に提言を行うものである。

事実、ヘブライ語 (Livnat 2002) や韓国語 (Choi 1995) にもその傾向がみられることから、類型論的研究を生産的に行うことによって、そこに反映される個別言語の特徴を考察していく。

まず、モダリティにおいて、意味変化の一方方向性仮説に反するとみられる現象が通言語的に体系的に観察されるので、より多くの言語を対照分析し、各々の固有性と相同性を見出してみる。言語類型論的アプローチをとる当然の帰結として、個別性が確認されるという意味から、言語系統を異にする言語の考察を通じ、従来言語普遍的に存在するとされてきた意味変化の仮説 (Traugott 1995) — 一方方向性あるいは主観化 — の妥当性を検討する。

さらに、各言語におけるモダリティ概念の歴史的意味変化に働いている原理 (認知メカニズム、文化モデル) を同定し、各々の相違点や類似点を考察する。

(3) 黒滝 (2004) では、日本語のモダリティの文法化を引き起こす誘因を認知言語学的観点 (池上1982) から解明するに至った。この現状を踏まえ、諸言語固有の文法化に働いている原理やそれらの背後にある認知メカニズムに普遍性はあるのかを追究すべく、認知類型論的観点から洞察し問題点を探りつつ妥当な理論を新たに提示することに本研究の主眼がある。そのために、個別の文法化現象にみ

られる特異な意味変化を引き起こす誘因や動機付けを認知言語学的観点から解明していく。

3. 研究の方法

(1) 日本語のモダリティの通時的研究によって、中古日本語のモダリティ体系を分析し、日本語のモダリティの文法化が普遍的一方方向性と相反していることを考察する。その上で、日本語のモダリティがepistemicを中心とした体系であることを論じる。

(2) 認知言語学的観点からのモダリティ研究のレビューを行い、認知言語学のパラダイムをモダリティ研究に応用する際の問題点を探る。また、モダリティの文法化に働いている原理やその背後にある認知メカニズムの普遍性を追究すべく、既存する文法化の普遍的モデルや仮説の検証を行う。とりわけ現時点で注視されている「一方方向性仮説」の妥当性を検証する。

(3) 日本語と類型論的に大きく異なる特徴を有する他言語との対照や、類型論的に非常に類似した言語との対照などを多角的に行うことで、日本語のモダリティの文法化の特異性を相対化させていく。

総じて、認知類型論的アプローチをとり、モダリティ体系を通時的かつ共時的に考察する実証的研究と最近の理論的研究を調和させるといった多角的な方法論を採用する。

4. 研究成果

(1) 日本語のモダリティの通時的研究

本研究により、日本語において終助詞のような談話機能的modal-markerが英語よりも発達しているのは、多義性の解消により日本語が文脈に依存する言語であることに起因していることが示唆された。また、日本語のモダリティの文法化は普遍的一方方向性と相反していることも示唆された。

さらに、epistemic用法を中心とするモダリティ体系が多音節化と狭義化を通して多義性を解消していき、deonticとepistemicという明確な役割分担ができあがったとする仮説を提示し検証した。なぜ日本語のモダリティ体系はepistemicを中心とするのか、といった問題を解明するため、通時的な文献資料を通して中古語のモダリティ体系の分析を行った。

(2) 「文法化」から「語用化」への進化の探究

個別の文法化現象に見られる言語変化が談話の顕現法に反映されることを考察した。具体的には、特異な文法化経路を辿る日本語のモダリティはepistemic modalityをプロトタイプとする体系であることから、とりわけ日

本語の可能表現の特異な意味機能を解明した。さらに、モノローグ的な認識モードから対人機能を配慮したダイアローグ的な認識モードへと発達していくことを論じた。

また、非多義的な日本語のモダリティ体系は敬語の使用行動に、多義的な英語のモダリティ体系はpoliteness表現に、各々有機的に関連していることにも触れた。総じて、日英語モダリティの文法化の相違が、文法化の背後で認知的に動機付けられる話し手と聞き手の談話における振舞い方の差異に関連していることを考察した。

日英語のmodal-markerに共通する機能としてpolitenessの談話標識のdiscourse-markerがあげられる。それらを分析することで個別のモダリティ体系に反映されるpoliteness論を展開し、文法化の後期段階に観察されるといわれる「相互主観化」(Traugott & Dasher 2002:40)を検討した。文法化という認知言語学とpolitenessという社会言語学とのインターフェイスの可能性を探った点で、本研究はsocial cognitionという新たな研究分野への貢献の曙光となり得よう。

(3) モダリティの文法化・意味変化とその方向性に関する研究

言語系統を異にする言語のモダリティ現象を考察し、日本語のモダリティの文法化の特異性を相対化させていった。例えば、個別言語にみられる特異な文法化現象が意味構造のあり方や成り立ちとも関連していることを考察した。その過程で、文法化には意味変化を伴わないものや、逆に文法化の伴わない意味変化もあることが明らかとなった。

本研究では、モダリティの意味変化を伴う文法化プロセス、即ち、既に文法的機能を獲得した形式の意味機能がさらに拡大するプロセス(多機能化)や機能的意味の意味区分が固定化されるプロセス(特定の意味への分化)など、文法化プロセスの後のさらなる意味変化に焦点を当てながら、モダリティ概念に関する歴史的意味変化の分析を重ねていった。その研究総括として、ヨーロッパ言語(英語:ナロック2008、独語:宮下2008)とアジア言語(タイ語:高橋2008、日本語:黒滝2008、中国語:玉地2008、王2009)の分析を紹介すべく、日本認知言語学会第8回大会(2007年)においてワークショップを開催した。そこでは、deonticからepistemicという一方向性以外に、個別言語のモーダルマーカ―によっては、deonticからevidentialへ、deonticからdeonticへ、epistemicからdeonticへと意味変化の可能性が多岐にわたって提示された。さらに、認知類型論的観点から、様々な言語に

現れる、有限個にまとめられる認知プロセスにはどのようなものがあり、各言語にそれがどのように現れているかについての実証研究が発表された。

(4) 個別言語の文法化現象にみられる特異な意味変化を引き起こす誘因や動機付けに関する考察

「意味変化の動機や方向性は言語によって異なる」(黒滝2004)という仮説をさらに検証するために、個別言語にみられる特異な文法化現象から意味構造のあり方や成り立ちを分析した。その上で、「印欧語モダリティは“意志”が分化の鍵となっているが、一方、日本語、タイ語、中国語や韓国語などのモダリティにおいては“否定”が分化の引き金となっている。」という仮説を検証した。また、認知類型論的観点(池上1981, Kemmer 2003)から考究し、言語による相違を認知様式の類型(文化モデル)の違いにより追究した(森山2009)。個別性と普遍性のあり方について具体的な示唆が得られたという点で本研究の意義は大いにあるといえよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 15 件)

- ① 黒滝真理子、Discourse Encoding behind Modal Grammaticalization: A Cognitive Perspective、日本大学法学部創設120周年記念論文集(印刷中) 査読無
- ② 黒滝真理子、独語母語話者の言語表現における客観的把握の存否—言語類型論的観点からみた日英独語のモダリティ研究—、桜文論叢 73、243-254 (2009) 査読無
- ③ 黒滝真理子、日英語の可能表現の意味変化とその方向性、日本認知言語学会論文集 8、616-619 (2008) 査読無
- ④ 黒滝真理子、否定形式に誘発されるモダリティの特異な文法化: 認知類型論的観点から、桜文論叢 68、155-172 (2007) 査読無
- ⑤ 黒滝真理子、認知言語学的観点からみた「かもしれない」の意味構造—「may型」と「It is possible that型」—、日本実用英語学会論叢 12、89-97 (2006) 査読有
- ⑥ 黒滝真理子、文法化にみられるModal-markerとDiscourse-markerの相関関係—認知類型論的観点から—、英語学・英語教育研究 11-25、33-38 (2006) 査読有
- ⑦ 黒滝真理子、文法化の方向性に反映される談話の特異性—認知類型論的観点からみた「可能」のモダリティ—、英語表現研究 2

2-23、44-55 (2006) 査読有

- ⑧黒滝真理子、日英対照：deontic modality >epistemic modalityの普遍性と相対性、日本認知言語学会論文集 5、386-396 (2005) 査読無
- ⑨森山新、日本語の言語類型論的特徴がモダリティに及ぼす影響—グローバル時代に求められる総合的日本語教育のために—、研究年報 5、147-154 (2009) 査読無
- ⑩森山新、グローバル時代に求められる総合的日本語教育と認知言語学、研究年報 3、111-117 (2007) 査読無
- ⑪高橋清子、タイ語の動詞tonの歴史的意味変化：義務モーダルの文法化・多機能化に関する事例研究、日本認知言語学会論文集 8、612-615 (2008) 査読無
- ⑫玉地瑞穂、中国語母語話者の認知過程から見る中国語のモーダルマーカの意味変化の考察：第2言語習得データを基に、日本認知言語学会論文集 8、624-627 (2008) 査読無
- ⑬ナロックハイコ、モダリティ表現の意味変化と主観化、日本認知言語学会論文集 8、628-631 (2008) 査読無
- ⑭宮下博幸、ドイツ語のような言語ではなぜ認知的意味への意味変化が生じるのか、日本認知言語学会論文集 8、620-623 (2008) 査読無
- ⑮王沖、認知言語学的観点を取り入れた「きつと」の意味構造の再考、認知類型論の観点からみたモダリティ研究—文法化のあり方をめぐって—(科研成果報告書)、163-170 (2009) 査読無

[学会発表] (計 1 件)

- ①黒滝真理子、池上嘉彦、高橋清子、宮下博幸、玉地瑞穂、ハイコ・ナロック、モダリティの文法化・意味変化とその方向性(ワークショップ)、日本認知言語学会、2007年9月23日、成蹊大学

[図書] (計 3 件)

- ①黒滝真理子、ひつじ書房、「日英語の束縛的モダリティ—認知的モダリティとの意味的関連性—」『現代の意味論講座—新しい意味研究の地平 第4巻 モダリティⅡ：事例研究』(近刊)
- ②黒滝真理子、くろしお出版社、『Deontic から Epistemic への普遍性と相対性—モダリティの日英語対照研究—』(2005)、総ページ数 262
- ③森山新・荒川洋平、凡人社、7章「対照研究と言語類型論のレッスン」『日本語教師の

ための応用認知言語学』(2009)、82-92

6. 研究組織

(1) 研究代表者

黒滝 真理子 (KUROTAKI MARIKO)
日本大学・法学部・准教授
研究者番号：20366529

(2) 研究分担者

森山 新 (MORIYAMA SHIN)
お茶の水女子大学大学院・人間文化創成科学研究科・准教授
研究者番号：10343170

(3) 連携研究者

高橋 清子 (TAKAHASHI KIYOKO)
神田外語大学・外国語学部・国際言語文化学科・准教授
研究者番号：50364922

玉地 瑞穂 (TAMAJI MIZUHO)
高松大学・経営学部・講師
研究者番号：90352088

ナロック ハイコ (NARROG HEIKO)
東北大学・大学院国際文化研究科・准教授
研究者番号：40301923

宮下 博幸 (MIYASHITA HIROYUKI)
金沢大学・歴史言語文化学系・准教授
研究者番号：20345648